OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 日本語とロシア語における不満表明の対照研究 : 発話連鎖と不満表明の種類に着目して |
| Author(s) | Prokopeva, Mariia |
| Citation | 大阪大学, 2021, 博士論文 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/82271 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

# 論　文　内　容　の　要　旨

| 氏　名　（　PROKOPEVA MARIIA　） | |
|---|---|
| 論文題名 | 日本語とロシア語における不満表明の対照研究<br>―発話連鎖と不満表明の種類に着目して― |

論文内容の要旨

不満表明という言語行動を対象とした研究は依頼、謝罪、ほめ、感謝などの言語行動と同様に様々な言語において対照研究がなされている。ポライトネス理論（Brown & Levinson 1987）で指摘されているように、不満表明は相手のフェイスを脅かす行為であり、人間関係を破壊するおそれがあるという。これまでの先行研究において、各言語の不満を表明する際に使われるストラテジーの特徴やその異同、また外国語学習者の母語からの負の転移などが課題として取り上げられてきた。また研究方法として多くの先行研究で採用されているのは談話完成テストであり、ロールプレイ方式を取った会話における不満表明の研究も行われてはいるものの、談話完成テストを用いた研究ほど多くはない。

まして、親しい相手（友人）同士の会話を中心にした日本語とロシア語における不満表明の研究は管見の限り見当たらない。そこで本研究では、両言語の不満表明を対照し、会話におけるそれぞれの特徴を明らかにすることを目的として分析を行う。具体的には、(1) 不満表明が現れた会話の構造を分析し、不満表明の連鎖を抽出すること、(2) 各場面で現れた不満表明の種類を分類し、その特徴を明らかにすること、(3) 不満表明とそれに対する応答という隣接ペアを分析することという3点を研究目的とした。

本研究の調査方法としては、自然な会話に近いデータを収集するために、自己再生型のオープンロールプレイを採用した。先行研究（郭2007、Nakayama 2008等）では、不満表明は特に親しい相手に対して現れやすいと述べられている。そこで、ロールプレイの場面の設定に関しては、対等、かつ親しい間柄にある関係での不満表明に限定し、両言語の日常生活で生じそうな場面1「共同作業に非協力的な人」、場面2「約束のキャンセル」、場面3「待ち合わせの遅刻」、場面4「忘れ物」という4つの場面を選定した。会話のデータを集めるには、本調査の協力者は10代～20代の日本語母語話者（JNS）とロシア語母語話者（RNS）の大学生及び大学院生20名ずつであり、ロールプレイに際しては、実際に友人である協力者同士で、女性同士のペア5組と男性同士のペア5組を設定した。なお、RNSの男性同士の1組のデータは4場面とも会話の形式で行われていなかったため、分析対象外にした。そのため、日本語40会話とロシア語36の会話を分析した。

本研究では、（1）不満表明の会話の構造、（2）不満表明の種類の分類、（3）不満表明に対する応答の分類という3つの点を分析項目として定める。不満表明が現れた会話を［開始部］、［主要部］、［終了部］に分け、不満表明の出現位置により［主要部］を《好ましくない状況》と《問題解決》という部分に分けた。また各言語の会話で見られた不満表明の発話は〈問い返し〉、〈間投詞による表出〉、〈皮肉〉、〈好ましくない状況への言及〉、〈好ましくない状況の評価〉、〈確認要求〉、〈気持ちの表出〉、〈被る影響への言及〉、〈話者の正当化〉、〈理由・説明要求〉、〈代償要求〉、〈改善要求〉、〈警告〉、〈非難〉という14種類に分類し、その特徴の考察を行った。更に、不満表明に対する応答を【謝罪】、【承認】、【意志表明】、【代償提供】、【問題解決提案】、【共同行為要求】、【事情説明】、【弁明】、【反論】、【気にしない】、【笑い】という11種類に分類し、両言語における不満表明とその応答という隣接ペアを分析した。

分析と考察の結果を以下の通りにまとめる。

1. 日本語とロシア語において【不満表明】の出現した会話数について述べる。両言語の間に大きな差は見られず、日本語は全 40 会話のうち、27 会話（68%）、ロシア語は全 36 会話のうち、26 会話（72%）で、両言語ともに親しい友人同士の会話において不満表明が現れやすい傾向が見られた。

2. 不満表明が出現した連鎖は、大きく 3 つのグループに分けられた。すなわち、グループⅠ:《好ましくない状況》（好ましくない状況を引き起こした話者の【事情説明】の後に現れる不満表明の連鎖）、グループⅡ:《問題解決》（【問題解決提案】の後に現れる不満表明の連鎖）、グループⅢ:《好ましくない状況》＋《問題解決》（好

ましくない状況を引き起こした話者の【事情説明】と【問題解決提案】の後に現れる不満表明の連鎖）また、日本語とロシア語では、不満表明の出現位置は場面によって異なっていることが分かった。両言語における不満表明の連鎖は会話の《好ましくない状況》と《問題解決》の両方で形成されることもあれば、どちらかの部分のみで形成されることもあったが、いずれの場合でも会話の前半に出現しやすく、好ましくない状況を引き起こした話者による【事情説明】の直後に現れることが多かった。但し、日本語では、場面によって【事情説明】の後に他の発話がされた上で不満表明が行われる会話も見られた。

3. 不満表明の種類に関しては、日本語では多く見られた順に〈間投詞による表出〉、〈非難〉、〈好ましくない状況への言及〉、〈確認要求〉が現れた一方、ロシア語では〈非難〉、〈好ましくない状況への言及〉、〈理由・説明要求〉、〈話者の正当化〉、〈被る影響への言及〉が現れた。両言語とも〈非難〉と〈好ましくない状況への言及〉が多く使用されたことが共通しているが、日本語における〈非難〉は場面 3「待ち合わせの遅刻」で多く出現していたのに対して、ロシア語は場面 3 以外の場面でも多く用いられていた。また、〈間投詞による表出〉は日本語の方が多く用いられていた一方で、〈被る影響への言及〉、〈理由・説明要求〉、〈話者の正当化〉はロシア語の方が出現数が多かった。この結果から、日本語では、相手が引き起こした好ましくない状況について間投詞によって不満を表すか、あるいはその状況について言及し、確認することが多く、不満が暗示的に表明される傾向が強いことが分かる。一方、ロシア語では、相手のことを責めたり、好ましくない状況や自分が受ける影響について述べ、自分の不満を正当化したり、更には相手が説明した事情に納得できなければ理由や説明を直接的に求めるなど、不満表明が明示的に行われるという特徴が見られた。

4. 両言語における 4 場面では、主に【不満表明】－【承認】、【不満表明】－【謝罪】、【不満表明】－【弁明】が使われていたという共通点が見られた。また言語ごとに見ると、日本語で多く現れた隣接ペアは【不満表明】－【承認】、【不満表明】－【謝罪】、【不満表明】－【弁明】であり、ロシア語では【不満表明】－【弁明】、【不満表明】－【謝罪】、【不満表明】－【承認】、【不満表明】－【反論】という隣接ペアが多かった。JNS は自分の過ちのせいで好ましくない状況が発生してしまったことを認め、それに対して謝罪の気持ちを表す傾向が強いのに対し、RNS は自分が引き起こした好ましくない状況について相手に理解を求めようとし、弁明するか、あるいは、問題解決の方法を提案する傾向が強いと考えられる。

5. 日本語では、「遠慮」、「察し」、「思いやり」（Lebra 1976、岡部 1996、石井 1996、井出 2006、熊谷 2013、等）という文化的な特徴の影響で、友人に対してであっても不満を暗示的に表明する傾向が見られた。それに対し、ロシア語では、「率直さ」（Ларина（Larina）2009、Ogiermann 2009a、Gallaher 2014 等）という文化的な概念がコミュニケーションで大きな役割を果たしているために、不満が明示的に表明される傾向が見られた。また、不満表明に対する応答にも両言語間に相違点が見られた。日本語では、不満を表明された側は謝罪をすることが多いのに対し、ロシア語において不満を表明された側は理解を求めようとして弁明をするか、好ましくない状況の問題解決の方法を提案する傾向が見られた。つまり（熊谷 2013 等）で述べられているように、日本語では相手との心的距離を取ること、遠慮すること等、ポライトネス理論（Brown & Levinson 1987）におけるネガティブ・ポライトネスを重視する一方で、ロシア語では、相手との心的距離を縮めること、自分が述べていることに共感してもらうことといった、ポジティブ・ポライトネス（Ogiermann 2009a 等）が会話の中心になっていると言えるのである。

様式７

# 論文審査の結果の要旨及び担当者

| 氏　名　（ PROKOPEVA MARIIA ） | | | |
|---|---|---|---|
| 論文審査担当者 | | （職） | 氏　名 |
| | 主 査 | 教授 | 筒井　佐代 |
| | 副 査 | 教授 | 真嶋　潤子 |
| | 副 査 | 教授 | 岸田　泰浩 |
| | 副 査 | 教授 | 中田　一志 |
| | 副 査 | 京都外国語大学教授 | 林田　理恵 |

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、相手のフェイスを脅かす行為であり人間関係にネガティブな影響をもたらすと言われる不満表明の言語行動をテーマとし、日本語とロシア語の会話における不満表明の言語行動を詳細に分析して対照し、両言語の異同や特徴を明らかにしようとした意欲的な研究である。先行研究では、データ収集方法として談話完成テストという記述式の方法が用いられることが多く、データとしての適切性が問われていた上に、不満の発話のストラテジーや表現に焦点が当たっていたが、本研究ではロールプレイという方法を用いて、より実際の会話に近いデータを収集し、会話分析の手法を用いて不満表明が現れる会話を相互行為として分析しており、先行研究よりも信頼性の高い研究方法を用いた点が高く評価できる実証的研究である。データ収集では、両言語において不満表明が生じそうな４つの場面を設定し、10代から20代の日本語母語話者とロシア語母語話者の大学生・大学院生20名ずつによる実際の友人同士の会話を合計80会話収集し文字化したものを、分析データとしている。分析に際しては、不満表明が現れた会話の構造の分析と不満表明の分類、不満表明に対する応答の分類を行って、不満表明の現れる位置、不満表明が出現した連鎖の種類、不満表明とその応答という隣接ペアの種類を明らかにし、さらに不満表明の言語表現や音調などの特徴についても記述を行った上で、日本語とロシア語の共通点と相違点を論じ、その背後にある文化的な背景についても考察している。

主な分析結果としては、両言語とも親しい友人同士の会話においては不満表明が現れやすく、会話の前半の《好ましくない状況》に言及する部分で出現しやすいという共通点が見られた一方で、ロシア語では好ましくない状況を引き起こした参与者による【事情説明】に対してすぐに【不満表明】がなされるが、日本語では【事情説明】の後それを受け入れるようなやりとりがあった上で【不満表明】が遅れてなされることもあることや、日本語では不満表明をする参与者が【問題解決提案】を行うが、ロシア語では好ましくない状況を引き起こした参与者が行うことなどの相違点が指摘されている。また、不満表明の種類として、日本語は〈間投詞による表出〉が多く用いられていたが、ロシア語では〈被る影響への言及〉〈理由・説明要求〉〈話者の正当化〉の出現数が多かったこと、〈非難〉〈好ましくない状況への言及〉は両言語で多く見られたが、日本語では特に「待ち合わせの遅刻」で出現したのに対し、ロシア語ではそれ以外の場面でも多く用いられていたことが特徴としてあげられている。さらに、不満表明の隣接ペアの種類については、日本語では【不満表明】に対して【承認】【謝罪】【弁明】の順に多く現れたが、ロシア語では【弁明】【謝罪】【承認】【反論】が多いことなどが指摘されている。これらの分析結果から、日本語ではロシア語に比べると不満を暗示的に表明していること、その理由として日本文化の「遠慮」「察し」「わきまえ」「思いやり」の概念が関わっており、親しい相手であっても摩擦を回避しようとしていること、一方ロシア語では「率直さ」が重視され、親しい相手だからこそ感情を直接的に述べることが好まれることを明らかにしている。また、日本語では【不満表明】を受け入れて謝罪することが重視されるが、ロシア語では【弁明】によって相手に事情の理解を求め、具体的に解決方法を提案することが重要であることも指摘されている。

膨大で多種多様なデータの分析結果をきれいに分類しようとするあまり、結論を単純化しすぎているきらいがあり、先行研究で指摘されている日本語とロシア語のステレオタイプな印象がそのまま結論となっているかのような印象を与えてしまっているため、結果的に先行研究との差異が見えにくくなっている点が残念ではある。しかし、膨大な言語データの精緻かつ丁寧な分析により、先行研究で指摘されていなかった上述のような両言語の特徴が明らかにされており、今後の不満表明の研究にとって参照すべき重要な知見が提出されていることに加え、日本語と

ロシア語の言語文化的背景に踏み込んで考察したことにより、両言語の言語行動の異同の要因をより深く理解できるような結論を導き出すことができており、異文化コミュニケーション研究にも応用可能な議論がなされている点で、幅広い研究分野に貢献する可能性のある研究として高く評価できる。また、ロシア語のわからない読者にも理解できるように丁寧に記述がなされている点、日本語、英語、ロシア語の文献を多数参照しながら説得力のある考察を心がけている点、両言語のデータそのものが本論文の独創的な研究手法の賜物であり力粗飼料としての価値がある点も評価できる。

以上のことから、論文審査担当者は、本論文が博士号を授与するにふさわしい優れた博士論文であると判断し、全員一致で合格との結論に達した。